

里山に学ぶ

片島 史朗（社会人コース）

1. はじめに

「里山」という言葉は江戸時代からすでに使われておりその後、色々な意味で用いられてきたが、今では広義の概念として「里山林、ため池、用水路、田んぼと畦がセットになった」生態系と考えるのが妥当と思われる。その里山の多くが高齢化と燃料・肥料革命、農業政策の変化などにより放置され荒廃し日本の生物の多様性すら損なわれようとしています。栗東市内の放置された里山の再生に取り組んで3年になりますが今回は、里山整備に伴い生物相の変化、金勝小学校の“山の子学習”のお手伝いで感じたこと、里山再生に取り組む仲間たちの想いや意見などを通じて学び、体感したことを報告します。

2. 里山の環境整備とそれに伴う生物相の変化

先ず環境整備として危険度合いの高い倒木や枯れ木の整理、道づくり、ため池の木道づくり、ビオトープづくりから始めた。それと平行して植生調査も行い、今後どのように生き物の様子が変わっていくのか観察していくことにした。3年間の整備により森に陽光が差し込み始め、雑草を刈り取った土手にはササユリやショウジョウバカマの花が咲き本来の里山らしさを取り戻しつつあることが実感できた。

3. 金勝小学校の“山の子学習”サポートで感じたこと

県下の各小学校では4年生を対象に「総合的な学習時間」を利用して「山の子学習」を実施しているが、我々の里山では金勝小学校4年生が自然薯栽培を行い1年間に亘り植物の成長や自然観察を行った。また実った自然薯を使ってお好み焼きづくりや交流会などを行った。これを支援し子供たちが自然に触れ植物を育てる喜びを感じてもらっていることは我々にとっても大きな喜びであり又、励みにもなっている。

4. 里山再生に携わる仲間の想い・意見

主宰者の呼びかけと“ゆっくり、楽しみながら、皆が主役で”の主旨に賛同して入会してきた仲間は自然との触れ合いを求めており、荒れた里山の再生意欲が強い。そこは癒しの場所であり仲間と共通の話題を持ち生き活きと活動できる場所でもある。しかしながらボランティアであるので自由が理想的であるが、それでは締りが無い。かといって組織として形をつくるのは窮屈であると複雑な心情を吐露している。一方、小学生の環境学習の場であり何かお役に立っていることには満足しており、今後ともさらに活動を充実しつつ外に向かっての情報発信も視野に入れだした。

5. おわりに

我々が取り組んでいる里山再生は小さなものであるが更に継続、充実させその果実（精神的な潤いも含め）を体感しつつ他の里山仲間や市町村へと情報を発信していきたい。里山保全の大切さとその価値の認識をいかに多くの人達に知ってもらおうか、これからの課題と考えています。